ダンス・イン・
ザ・マフィア　7

# ダンス・イン・ザ・マフィア　7

**EntsCat**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19178775**

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ♡喘ぎ, もぶおじさん×霊幻

誰得？俺得！なマフィアパロです。師匠総受けです。暴力描写や殺人描写を含みます。今回はもぶおじ霊を含みます。お好きな方はよろしくお付き合いください。倫理がアレ。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

# Table of Contents

# ダンス・イン・ザ・マフィア　7

「ァっ、ああっ♡んんっ、あ、あっ……！」
霊幻がコンシリエーレのモノを咥えたまま身体を上下させれば、柔らかな黄金がキラキラと月の光を反射させて光る。
「イくイくイく、イくぅ……っ♡」
快感に蕩けた愛らしい童顔に酔えば、月に照らされたとろけるような白い肌が、雫をはじきながらくねる。
「ああ、私の『ミエーレ・ヴィリーノ』……！」
陶然として手を伸ばすコンシリエーレに艶やかに微笑んで、その手のひらに薄い唇を寄せる。
コンシリエーレが体内で精を吐いたのを感じて、霊幻もびゅるると射精してみせる。
「あぁっ……♡」
コンシリエーレは身を起こして、快感に喘ぐ霊幻に深く口付ける。
繋がったまま霊幻の身体をまさぐる男は、今日は大きなルビーがハマった指輪を霊幻の指にはめる。
「よく似合うよ」
うっとりとそう言うコンシリエーレに、霊幻はふんわりと微笑んだ。

※

かつ、と鉄板入りの革靴が孤児院の床を鳴らす。
「あっ、おかえりなさい、霊幻先生！」
「おー、ただいま〜」
笑顔の子供たちの頬にキスをしながら屋敷に向かう霊幻の後ろからは、憮然とした芹沢が着いてきていたし、
「よぉ、おかえり」
その先には不機嫌ＭＡＸのエクボが出迎えにきていた。
「趣味の悪ぃ香水臭え」
「わぷっ」

エクボが自分の香水をアトマイザーで真正面から霊幻に吹きかける。
情報収集のために霊幻がネオ・チオード・ファミリアのコンシリエーレとデートしているのが２人とも非常に気に食わないのだ。
「ホントですよ」
芹沢もアトマイザーを取り出して霊幻に吹きかけた。
お互いにマーキングするような仕草に、バチっとエクボと芹沢の間で火花が散る。
が、２人の視線は、霊幻が左手の薬指にしている、宝石が大きいだけでデザインの冴えない指輪に固定された。
その位置に贈られた指輪があるのは、２人とも大層気に入らない。
コンシリエーレとアンダーボスの目が殺気に細められる。
「ああ、これか？芹沢、悪いけど換金しといてくれるか。孤児院の維持費に回してくれ」
が、霊幻はすぽっとその指輪を外してぽいっと芹沢に投げた。
「ショウくんの入院してる病院が分かった。もうあの男とのデートは終わりだ」
油断して行為の後に眠ったコンシリエーレのスーツのポケットから、適当な偽名の病院の診察券が出てきたのを、霊幻はさっとメモしておいた。帰りにすぐに部下に調べさせたら、一部屋だけ異常なほどネオチオードファミリアが警備をしていたので、アタリだと判定したのである。
「明日には襲撃してショウくんを奪還する。その心づもりをしていてくれ。モブ、律、テルにも話をするからエクボ悪いけど呼び出しておいてくれ」

※

「襲撃には、この麻酔弾と麻酔薬を塗ったカトラリーを使ってくれ。各自マガジンに自分で詰めてくれ。いつもは使用禁止してるけど、今回の作戦行動の時だけ特殊なスマホを渡しておくから、後で各自動作確認してくれ」
ドンの執務室にエクボ・芹沢・茂夫・律・輝気を集めて、霊幻が段

ボールに入った特殊な41マグナム弾や9×18mmマカロフ弾を差し出したのにエクボは眉をひそめる。
（どうやって入手したんだ、こんな特殊なモン）
よほど高名な武器職人に伝手が無いと手に入らないものばかりである。
（本当に何者なんだ、お前）
エクボはチラリと霊幻を盗み見る。
「麻酔弾っつったって、心臓や脳に当てれば死んじまうからな。どこに銃弾でキスするかは良く考えろよ……何だよ」
「いや、何でもねぇ。……いや、ああ、デケエ得物は芹沢のカラシニコフだけにすんのか？大丈夫か？」
「このメンバーなら大丈夫だろ。超能力もあるし。病院にカチコむし、被害が大きくなりそうな武器は使いたくねぇ。一般の患者も医者なんかもいるからな。なるべく死者を出さないようにしていくぞ」
──甘いなぁ、とエクボは思う。が、その甘さを許容するだけの物量と実力が霊幻にはあった。
「「「「「Ｓｉ、ボス」」」」」
「よし、各自準備に入れ」
霊幻は麻酔弾を無造作に掴み、一瞬でマガジンに詰めていく。
「……」
その鮮やかすぎる手際を、茂夫はうっとりと、エクボと芹沢はいぶかしながら見ていた。

※

夜のチョウミ・オスペダーレ（病院）は、要塞と化していた。
「うーん、流石に気が付かれたか」
病院の周りには装甲車が５台。
病院を囲う壁の上には、機銃が十数台備え付けられていた。
「ま、こっちにはモブ達がいるからな。問題にもならねーわ。……巻き込んですまん。頼んだぞ、モブ、律、テル」
「「「Ｓｉ、ボス」」」

茂夫が手を翳して、装甲車に意識を集中させる。
「モブ、ひっくり返せ」
「──はい」
茂夫が手をぎゅっと握りながら翻すと、フワリと浮かび上がった装甲車がぐるんと回転して逆さになって地面に落ちた。
「よくやった。……律、次頼めるか」
「分かってますよ」
薄くバリアを張った律がカトラリーを無数に宙に浮かせて刃先をギラりと月光に煌めかせる。
「いけっ……！」
律が手を交差させると轟音を立ててカトラリーが機銃に向かって飛んでいく。
大きな鈍い金属音を立てて機銃が切り裂かれていく。
あっという間に沈黙した数十台の機銃は、もはやただの金属ゴミと化していた。
「よくやった」
霊幻が頭を撫でてくる手を律はうざったげに払う。
「褒め言葉より、ご褒美がいいです」
「分かってるさ」
つい、と霊幻は自らの唇を思わせぶりに指でなぞる。
「レッカ・レッカ……特別なロリ・ポップをお前にやろう」
霊幻の赤い舌がチロリと覗く。
ごく、と不覚にも律の喉が鳴った。
「売女め……」
「こら、口が悪いぞ」
照れ隠しに呟いた律を霊幻がたしなめる。
めっ、と言うだけの霊幻に、甘いこって、とエクボが呟く。一般のソルダートならぶん殴られている。子供だから許されている、と言うことをいつかみっちり教えないといけないな、とエクボは思案していた。
「──突入するぞ。全員病院の地図は頭に入ってるな？子供達は特に俺のそばから離れないように」
「分かっています。何に替えても貴方を護ります」

輝気が胸を叩きながら言う。
果たして護られるのはどっちかな、とエクボと茂夫はひっそりと思う。
「ドンの護衛は俺がメインでやるから、君たちは敵を無力化しながら、自分の身を守ることを優先してね」
さりげなく芹沢が釘を指す。戦闘経験なら圧倒的に芹沢の方が上である。他人を護りながら戦うのは高度な戦闘術になる。
「「「Ｓｉ、アンダーボス」」」
子供達が不満気に、でも素直に返事をした。
「ま、芹沢もいざとなれば自分の身を守る事を優先しろよ。俺、お前を守るのまでは手が回んねぇからな？」
「何言ってるんですか……霊幻さんは非戦闘員なんですから、俺から離れないでくださいよ、本当に」
霊幻に呆れた声を上げる芹沢。
「「……」」
エクボと茂夫は、じっと霊幻を見て黙る。
本当はこの場で１番強いのは霊幻なんじゃないのか、という疑問を呑み込んで。
「行くぞ！」
病院の入り口のガラス戸を輝気が粉々に崩れ落ちさせ、まだそのきらめきが残る中を霊幻を先頭に突入する。
「てめぇ、どこのモンだ……っぐあ！」
病院の中に待機していたネオチオードファミリアの黒服たちが霊幻達を見て立ちあがろうとするが、銃を抜かせる前に霊幻が麻酔弾を右肩に撃ち込んでいく。
入り口を抜けて会計の待ち合いホールに入ると、１０人ほどの敵がざわめきながら銃を抜く。
「てめぇらアジアンだな！？つーことはレイゲンファミリア……ぐぁっ！！」
エクボが１人は撃ったが、集中砲火を浴びるのを芹沢のバリアで防いで足止めされてしまった。
「テルくん、薙ぎ払えるか」
「任せてください」

芹沢のバリアの後ろから金色のムチが飛び出して敵を横から殴りつける。
「芹沢、バリア解除！」
敵が体勢を崩した瞬間に霊幻とエクボが待ち合いイスの間に躍り出て、敵の右肩に麻酔弾を打ち込んでいく。
「よし、クリア！階段に向かうぞ！」
兵隊の練度が違う。人数を置いたところで、霊幻やエクボたちの敵では無かった。
（なんだこの射撃の正確さは）
階段に向かいながら、ひっそりと芹沢は霊幻の射撃能力に舌を巻く。元軍人のエクボに匹敵する正確さで、武器を持つ手を無力化していく霊幻が、芹沢には特殊部隊の隊員が何かに見えてきた。
（情夫上がりの、悪ギツネ、か……）
世間一般的な、自分もそう感じていたドン・アラタカの評価と、目の前の正確無比な狙撃手の姿が乖離していく。
（この人を手に入れようとしたら、もしかしたらすごく大変なのかもしれないな）
何故か芹沢は、薄ぼんやりとそう思った。
「下調べよりも警備が厳重だな」
得物をスナイパーライフルに持ち替えて、階段の下から上に向けて敵を撃つ霊幻が呟く。
「ああ。情報が漏れてるな、コレ」
同じくハンドガンで階段の敵に応戦するエクボがそれに応える。
「──らちがあかない」
ふわ、と霊幻が階段の手すりの上に乗る。
上着をはためかせながら、そのまま軽やかに駆け上がり、敵の鼻っ面に膝蹴りをかました。
「なっ！」
突然現れたようにしか見えない霊幻に敵が混乱状態におちいる。
１０人ほどいた階段の敵は、瞬く間に霊幻の麻酔弾に沈んだ。
「クリアだ。病室に急ぐぞ」
「無茶すんなよ！」
エクボが少し怒って怒鳴っている。

「だったら俺より早く敵を寝かしつけてくれよ」
呆れたように霊幻が返した。
「鮮やかです、師匠……」
茂夫と輝気がうっとりとその姿を見ている後ろで、律はじっと推しはかる様に霊幻を見ていた。
「この角を曲がればショウくんの部屋……」
ドパラタタタタタ！！
自動小銃の音が響いてエクボが飛び出そうとしていた霊幻の首根っこを掴んで壁の裏に退避させる。
「……やあ、待ってたよ、愛しのアラタカ」
「コンシリエーレ！奇遇じゃないか、こんな所で会うなんて」
霊幻は少し額を掠めた銃弾で切った。胸のポケットからハンカチを出して縛る。
「顔の傷は血がよく出る。俺の視界がちょっと悪くなるから、気をつけろ」
ひそ、と霊幻は仲間にささやいた。
「──強行突破する！」
とささやいた霊幻に、
「はぁ！？」
とエクボは反対して、
「分かりました！」
と芹沢は続いた。
廊下に躍り出たグレーのジャケットが、穴だらけになる。
「！馬鹿っ、アラタカには当てるなと──！」
が、ジャケットはひらりと透明人間のように踊って床に落ちた。
「え──」
ギシリ……
は、と異音にチオードのコンシリエーレが上を見ると、病院の電灯に指で捕まった霊幻が、ブンと足を振った所だった。
「上だ──！」
霊幻が振り子の要領でチオードのコンシリエーレに飛び蹴りをかますと同時に、躍り出た芹沢が自動小銃を無力化する。
「喜べ、アンタの好きな騎乗位だ」

マウントを取りながら艶やかに霊幻が微笑う。
「待て！お前の大事な子供がどうなってもいいのか？」
「ん？」
麻酔弾を打ち込もうとした霊幻の手が止まる。
開け放した病室の先で鈴木将に拳銃を向けているのが見えた。
「！ショウには手を出さないって約束だろう！！」
律が叫ぶ。
「悪いなぁボウヤ、子供のお遊びには付き合ってられない時もあるんだよ」
「裏切ったな……！」
その律の顔をエクボが殴り飛ばす。
「……テメェには後でキツい説教がある。何をしたか自分で分かってんな？俺たちの情報を漏らすってのは大人なら許されない裏切りだぞ」
「……」
俯く律にあわあわと所在なさげにする茂夫。
「……友達を想ってのことだ、ちょっと手心を加えてやれよ、エクボ」
「ドン！！」
流石に甘すぎる、とエクボが叫ぼうとしたのを霊幻は目で制する。
「……で？何が望みだ？」
床に押し倒したままのチオードのコンシリエーレに霊幻は淡々と訊いた。
「まずは全員の武装解除だ」
レイゲン・ファミリアのメンバーはぱっと手を開いて武器を床に落とす。
「リツ・カゲヤマもこちらに来い」
「……っ」
起き上がったチオードファミリアのボスは、霊幻と律を抱き寄せてその身体をまさぐった。
「これからレイゲン・ファミリアは俺の傘下に入って貰う。お前らは俺の情夫だ。可愛がってやろう」
「う……」

中年男の趣味の悪い香水と体臭の混ざった臭いに律は顔をしかめる。
「なんだ、その程度のたくらみか、くだらん」
はぁ、とつまらなさそうに霊幻はため息をついて。
耳の上の髪の中に隠していたナイフを将に銃口を向けていた黒服に投げた。
「うっ！？」
足にナイフが刺さった黒服に呆気に取られた周囲を後ろ回し蹴りで薙ぎ倒し、霊幻は素早く将の病室に入って裏拳で黒服を沈黙させた。
「無力化しろ！」
霊幻の叫びにはっと芹沢達が動き出す。
銃を拾って麻酔弾で黒服達を黙らせる。
芹沢は無言でチオードのコンシリエーレの腕を捻り上げた。
「よくやった。俺はその男にやりたいことがある。分かるか、芹沢？」
芹沢は、酸素吸入機や心電図に繋がれた将をチラッと見る。
──罪のない、子供を。
「ショウくんと同じ目に合わせてあげましょう」
「ぴんぽんぴぃんぽぉん！大正解だ、芹沢。……頼んだぞ」
エクボと子供達は将を生命維持装置系統ごと病室から運び出す。あとは病院の前に待機させているファミリアの救急車に乗せればミッションコンプリートだった。
「がっ！ぐあっ！！」
霊幻は芹沢に蹴られるチオードのコンシリエーレを、しゃがみ込んで頬づえをついてにこにこと笑いながら眺めている。
「た、助けてくれっ、俺とお前の仲だろう……？」
はて、と霊幻は斜め上を見る。
「ただお前が俺の股間で汚いケツを振るダンスを踊るだけの仲だと思っていたが、違ったか？」
チオードのコンシリエーレの顔が絶望に染まる。
「そんな……俺はお前を愛して……！」
くす、と毒蜜のような瞳が歪む。

「パパパパパ　パパゲーナ♪」
霊幻はただ暴力を振るわれるコンシリエーレを歌いながら眺めてはじめる。モーツァルトの魔笛だ。
「パパパパパ　パパゲーノ♪」
それに芹沢が返す。
お、と霊幻が気を良くした。
「"さあ　もうおれのものだ？”」
「"ああ　おまえのものよ"」
２人が愉しく歌う中で、コンシリエーレは動かなくなっていった。

※

「……うちのファミリアが迷惑かけたね」
さてボコったコンシリエーレをどうしようか、と考えていたら、ネオ・チオード・ファミリアのアンダーボス、槌屋華があらわれた。
「今回は無関係な子供まで巻き込んで、完全にコンシリエーレにやられた。恥ずかしいよ。その男はこちらに渡してくれ。処分はこちらでする」
芹沢が放り投げたコンシリエーレを槌屋がキャッチする。
「今回の件、私たちはドンの依頼をあんたたちが受けてくれただけ、という形で処理させてもらう。それでいいね？」
「ああ」
霊幻は膝をはたいて立ち上がる。
「そっちのファミリアのドンはアンタがやった方がいいと思うぜ。じゃあ、健闘を祈る」
ぼろぼろになった上着を回収しながらも、霊幻は颯爽と現場を後にした。

※※※※※

誰が最初に霊幻からご褒美を貰うのか、という話になって、揉めて殺し合いになりかけたので、律を除いた４人は取り敢えず一緒に祝杯を挙げることになった。

「あ、俺、アルコール飲まないから」
そう言う霊幻に分かったと返しながらも、乾杯の寸前にエクボは自分と霊幻のグラスを入れ替える。たまには気を抜いてもいいだろう。
「「「「「かんぱ〜い！」」」」」
なるほど、一瞬で霊幻は出来上がってしまった。
（こりゃあセックスは無理だな……）
芹沢もふにゃふにゃになっている。
２人でげらげら笑いながらワインの瓶を傾けていた。
「れも、ほんろーに今日のれーれんさんは凄かっられすね！やっぱりれーれんさんが『ミエーレ・ヴィリーノ』なんじゃないれすか〜！？」
ふん、と霊幻が鼻を鳴らす。
「どいつもこいつもミエーレミエーレ……馬鹿馬鹿しい。俺がミエーレな訳ないだろう？」
こぷん、と霊幻がワインのグラスを傾ける。

「俺がミエーレを殺したんだから」

こくん、とエクボの喉が、静かに鳴った。

続